

中国のラテンアメリカ研究と研究機関(研究機関紹介)

著者	今井 圭子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	1
ページ	32-33
発行年	1984-10-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006806

中国のラテン
研究今井
(上智大学)

思いかげず第12次日本友好学術交流協議会訪中団の一員に加えていただき、今年の7月25日から8月5日まで北京と東北地方を訪れることができた。訪中団は鶴見和子上智大学教授を団長、菊地昌典東京大学教授を秘書長とし、法学、経済学、社会学、歴史学、国際関係論など社会科学における各分野の専門家に加えて、おりしもオリンピック開催中で、初参加の中国チームが大活躍している最中、体育原論の専門家も含めた計10名で構成されていた。今度の訪中の目的は、一つに中国の工業開発と伝統技術との関連について東北地方を中心に観察し、関係者の意見聴取を行なうこと、二つに各団員の専門分野において中国の研究者、研究機関との学術交流を深めていくことであった。前者に関しては別途稿を改めるとし、ここでは後者について、私がラテンアメリカ研究者との交流をとおして知ることができた、中国におけるラテンアメリカ研究と研究機関について紹介したい。

中国におけるラテンアメリカ研究は、北京の中国社会科学院付属のラテンアメリカ研究所、上海の復旦大学内にあるラテンアメリカ研究所を中心に進められており、各大学においても歴史、政治、経済、国際関係、教育などの各分野でラテンアメリカ研究が盛んになりつつある。現在ラテンアメリカ研究に関する学会としては、ラテンアメリカ史学会、中国ラテンアメリカ研究学会があり、これらの学会は中国国内のラテンアメリカ研究者相互間の学術・情報交換の促進、さらに最近では外国のラテンアメリカ研究者との学術交流の場として重要な役割を果たしている。ちなみに最近2～3年の間にG・フランク、C・フルタード、F・ビクーニャ、O・スネルなど代表的なラテンアメリカ研究者が訪中し、中国側関係者との間に幅広い学術交流の場を持ったことである。またラテンアメリカに生まれたプレビッシュ理論や従属理論に対する関心が深まるなかで、S・アミンも最近訪中して従属理論に関する討論の輪に

加わったとの話を聞いた。現在までのところ中国におけるラテンアメリカ研究の軸は経済学、政治学、国際関係論によって担われてきたが最近歴史学や教育学の分野においても研究が深まりつつある。

私が中国のラテンアメリカ研究について詳しく話を伺う機会を得たのは、中国社会科学院ラテンアメリカ研究所南米地区研究室の徐文淵主任からであった。同氏は1972年から78年まで在アルゼンチン中国大使館の外交官を務められ、帰国後ラテンアメリカ研究に転じられた方で、時にブエノスアイレス訃りの混ざる流暢なスペイン語で熱心に話して下さった。たまたま私も1972年から1年半ばかりアルゼンチンに留学しており、当時への郷愁も手伝ってひとしきり話が弾んだ。同主任の説明と中国社会科学院の要覧に沿って以下ラテンアメリカ研究所の概要を紹介しておこう。

中国社会科学院ラテンアメリカ研究所
北京市地安門東大街三号
電話 44.4373

当研究所は1961年に中国科学院哲学社会科学部内に創設された。その後文革期の混乱で一時期研究所の閉鎖を余儀なくされたが、1976年5月に本格的な研究所として再建された。81年には31を数える中国社会科学院付属研究所の一つに編成替えされ、現在に至っている。研究所の目的は、「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指針として、ラテンアメリカ地域および諸国の政治、経済、国際関係、社会、歴史、文化上の基本的情況、特にラテンアメリカが当面する重要な現実の問題および理論問題に関する系統的な調査研究を推進すること」(『中国社会科学院』1983年5月より)と規定されている。

総人員118名のうち80名が研究員、15名が司書を含む業務補助員、残りの23名が行政人員となっている。また組織構成は次のとおりである。まず副所長(苏振兴、赴勇増)、学術委員(苏振兴、沙丁、张佐华、

アメリカ研究
と
機関圭子
(助教授)

高钰、涂光楠、徐世澄、徐壮飞、王守海、李春辉、高放)、副研究員(沙丁、张佐华)、副译审(高钰、涂光楠、徐壮飞)からなる上部管理部門があり、その下に四つの研究室と編集部、図書資料室、管理機構がある。研究部門は経済・国際関係研究室(主任・高钰、副主任・刘徳、张森根、研究員13名)、政治・歴史研究室(主任・物典球、副主任・涂光楠、研究員13名)、南米地区研究室(主任・徐文淵、副主任・陈作彬、研究員17名)、中米・カリブ地区研究室(主任・張文閣、副主任・毛相麟、研究員18名)から成り、また出版部(編集部主任・李学志、同副主任・周俊南、同人員3名)、図書資料室(主任・舒吉昌、副主任・王完成、张念括、業務補助員12名)によって構成されている。なお定期刊行物として『拉丁美洲丛刊』が出版されている。

次に各研究室の最近の研究課題をあげておこう。まず経済・国際関係研究室では、「ラテンアメリカ経済概況」、「ラテンアメリカ地域の経済協力」、「戦後ラテンアメリカの国際関係」、政治・歴史研究室では「戦後ラテンアメリカの政治」、「中国とラテンアメリカの関係史」、南米地区研究室では「中国とブラジ

ルの経済比較」、「南米諸国の民族的経済発展の道」、「南米諸国における民主化の進展過程」、さいごに中米・カリブ地区研究室では「アメリカとソ連のカリブ地域における争奪戦」、「中米情勢」、「メキシコ経済発展の諸問題」、「中米・カリブ経済概況」などである。

徐主任から、苏振兴・陈作彬・张宝宇・朱忠、吕银春共著『巴西经济』(北京、人民出版社、1983年)と、徐文淵・陈舜英・刘徳共著『阿根廷经济』(北京、人民出版社、1983年)をいただいた。いずれも当研究所の研究業績としてまとめられたもので、各国経済概況シリーズの一部を成している。主としてブラジル、アルゼンチンの両国で出版されている統計資料や研究書、雑誌、新聞に依拠して叙述され、経済概説書としてはバランスのとれた好書である。同研究所は2万点近くの資料を蔵し、その多くはスペイン語、ポルトガル語文献とのことであった。ラテンアメリカにとっては共に地球の反対側にあり、そのメリットとデメリットを持つ日中両国間で、今後ラテンアメリカ研究に関する学術交流が深まることを期待したい。



このほど完工した
中国社会科学院本
部ビル
(真田撮影)